

トランペットヴォランタリー “デンマーク王の行進” の考察と演奏法

Consideration and Performance of Trumpet Voluntary “Prince of Denmark’s March”

新 村 元 植

Genshoku Shimmura

はじめに

Trumpet Voluntary は、その華やかな音色とメロディーで万人に愛されている曲である。トランペット奏者においても必ずレパートリーに入れたい曲の一つである。しかしその演奏には多様な編曲があり、現在においてどの演奏がオリジナルに近いものであるかを研究することが必要になる。

またこの曲は、当初ヘンリー・パーセル (Henry Purcell 1659~1695)^(注1) の作曲とされていたが、近年の研究によりジェレマイア・クラーク (Jeremiah Clarke 1673頃~1707・12・1) の作曲であることが判明している。これらのことを明らかにしながら演奏することにより、演奏曲への技術と理解を深めたい。

I ジェレマイア・クラークとトランペットヴォランタリー

1) 作曲者について

ジェレマイア・クラーク (Jeremiah Clarke 1673頃~1707・12・1) はイギリスの作曲家でオルガン奏者。王室礼拝堂少年聖歌隊員となり、後にウィンチェスター・カレッジやセントポール寺院のオルガニストなどを歴任した。作品として礼拝音楽、鍵盤音楽、舞台のための音楽などを残している。彼はウィンチェスター・カレッジのオルガン奏者を経て、1703年、ジョン・ブローの後任としてセント・ポール寺院の少年聖歌隊員監督に就任。1704年にはウィリアム・クロフトと共に王室礼拝堂の共同オルガン奏者に任命される。また、1696年以降、ドルリー・レーン劇場を中心に付随音楽の作曲家としても活動した。1707年、友人関係の悩みによる精神錯乱のため、セント・ポール寺院構内にてピストル自殺した。

作品にはアンセム (Anthem イギリス国教会のための賛歌・祝歌・聖歌・交唱賛美歌)、オード (Ode 神仏をたたえる歌、自然の事象にことよせて高揚した精神を歌う叙情詩)、世俗歌曲、付随音楽、ハーブシコード音楽など。^(注2)

ジェレマイア・クラークの死因については確定的なことは判明していないが、事実は以下の通りである。

「妹（アン）の結婚式の1か月半後、クラークは郊外にある彼の友人宅を訪れていた。そしてそのときは彼の心を憂鬱が支配していた。そこで彼はロンドンへ帰った。その後まもなくの12月1日、彼は銃により自殺した。彼は34歳であった。遺書も残さず、結婚もしていなかったため、身寄りもなかった。12月3日、彼の亡骸は聖ポール寺院の聖グレゴリー地下納体所、南東の地に埋葬された。」^(註3)

これらはホーキンス^(註4)の General History や Oxford Dictionary of National Biography で確認できる。これらの記事ではその死因について「報われない恋愛が彼の憂鬱を引き起こし、自殺に追い込んだ。(unrequited love caused this melancholy which pushed Clarke's to the point of suicide)」とされている。一説では、妹であるアン (Ann) と義理の弟であるチャールズ・キング (Charles King) が自殺に追い込んだのではないかとの推測も当時ではあったようである。しかし現在ではこれらの説は否定されている。また誰が彼の死体を発見したのかなど、謎が多い。いずれにせよ、現在よりも自殺自体は当時としては大変な出来事だった事、当時のロンドンでは自殺が流行していたとの記事を紹介している事等から推測すると、有名人であるクラークの自殺は、センセーショナルな出来事であった。^(註5)

2) Trumpet Tune

クラークの作曲した「トランペットの調べ」(Trumpet Tunes) は現在12曲が現存しているが、その中の6曲が“A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord”に残されている。“A Trumpet Minuet” (P10), “A March” (P11), “A Ayres” (P11), “The Emperour of Germanys March” (P12), “The Serenade” (P12), “The Prince of Denmark's March” (P13) である。これらはもちろんトランペットのために作曲されたのではなく、図1の表題にあるようにハープシコードまたはスピネットのため

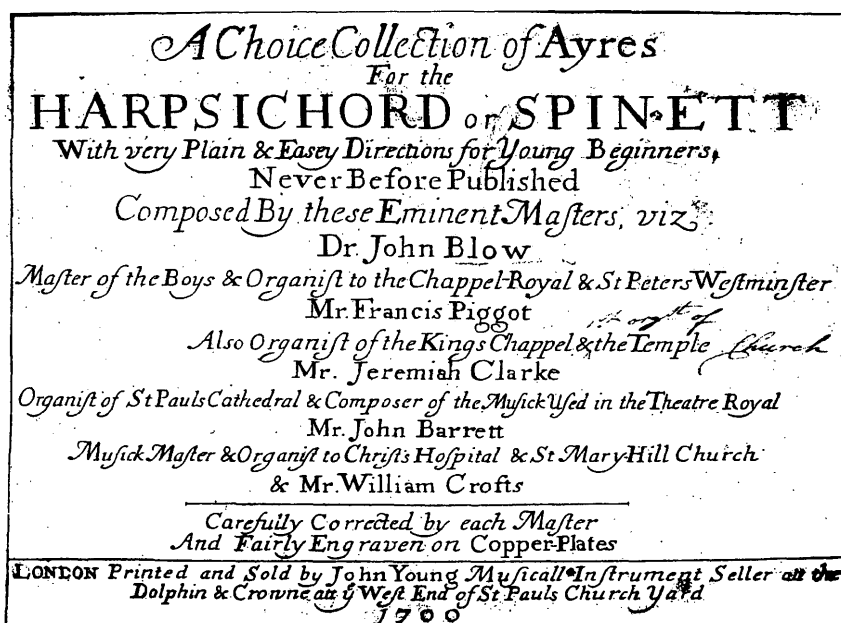


図1 A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord, P.1

に作曲されたのである。この “Trumpet tune” は当時のスタイルで、愛国心を煽るような勇ましい曲調に名付けられた。この当時は人気のある曲調であったらしい。ほとんどが “March” と題された 4 / 4 であるが、“A Trumpet Minuett” は 3 / 4，“The Serenade” は 3 / 2 で作曲されている。

楽譜 1 は A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord (1700年刊行) の13ページである。そのタイトルには The Prince of Denmark’s March by Mr Clarke と記述されている。また、クラークが作曲した The Second Book of Harpsichord Master (大英博物館 Add.31465) にも同じ旋律を見ることができる。この事により Trumpet Voluntary はジェレマイア・クラークの作曲と断定できるのである。また、“The Prince of Denmark’s March” のデンマーク王とは誰かについては定かではないが、オルテンブルグ家 (Oldenberg) のゲオルグ (Georg 1653-1708) ではないかと推測する。しかし根拠は即位年 (1670-1708) だけであるので、推測の域を出ない。クラーク自身もこの曲をデンマーク王に献呈した様子はないので、おそらくはイメージの産物であろう。



楽譜 1 (註6) A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord; The Prince of Denmark’s March, P.13

(図 1, 楽譜 1 ; The New York Public Library; The Research Libraries at Lincoln Center)

3) Trumpet Voluntary

Trumpet Voluntary の Voluntary とは、「(自由) 意志の」という意味で、ラテン語を語源とする。英国教会では礼拝の前後に演奏されるオルガン曲を意味している。演奏形式は特に指定がなく比較的自由な演奏で、即興的演奏もあったらしい。比較的明るく勇壮な曲が演奏されることが多かったために、これをトランペットとオルガンで演奏することにしたのがジェレマイア・クラーク (Jeremiah Clark 1674頃～1707) 作曲の Trumpet Voluntary である。しかし、当初クラークはこの曲を “Prince of Denmark’s March” として作曲したのであって、Trumpet Voluntary として作曲したの

ではないことを確認しておく必要がある。

Trumpet Voluntary は最近までヘンリー・パーセル (Henry Purcell 1659~1695) の作曲とされてきたが、研究者によりパーセルと同時代のジェレマイア・クラークが作曲したことが1939年に判明している。この曲の原曲は「The Prince of Denmark's March」(デンマーク王子の行進)(楽譜1)という。原曲は1700年に刊行された複数の作曲家による「ハープシコード曲選集」(A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord)(図1)に見ることができる。

ではなぜこのような誤解が生まれたのであろうか。1895年から50年間、プロムナード・コンサートの指揮者を務め、イギリス大衆に人気があった指揮者のヘンリー・ウッド卿 (Sir Henry J. Wood 1869~1944)^(註7) が原曲をもとにして、トランペットを使用した曲に編曲したことが発端である。当時、大英博物館の中に原曲を編曲した楽譜(楽譜番号 MS Add.31465)があり、その楽譜には作曲者が記されていないからである。Woodはその作者不明の曲をトランペット独奏曲(オーケストラ伴奏)に編曲した。そして編曲した曲を Purcell の作品であると誤解したのである。その第1の原因は、Woodが編曲に使用したハープシコード曲集には作曲者不明の曲として、「Trumpet Voluntary」の原曲である「The Prince of Denmark's March」が収録されていたが、その前後にヘンリー・パーセルの作品が収録されていたことが原因ではないかと考えられる。そして第2の原因は、その当時のオルガン曲やハープシコード曲にはパーセルの作風を真似た曲が数多く存在したことにあると考えられる。また、1878年にはロンドン市井のオルガニストであったスパーク (Dr. William Spark) は、オルガン小曲集 (Short Pieces for the Organ) を刊行した。そのオルガン小曲集に「古い手書き楽譜 (an ancient manuscript) より」と題して “Trumpet Voluntary in D major, Henry Purcell” と誤記してしまったのである。ヘンリー・ウッドは現存していないが、恐らくこの「古い手書き楽譜 (an ancient manuscript)」またはオルガン小曲集も当時大英博物館にあり、参考にしたのではないかとトーマス・テラー^(註8) は推測している。そして、1939年にクッドワース (Charles Cudworth) により Trumpet Voluntary の旋律が A Choice Collection of Ayres for the Harpsichord の The Prince of Denmark's March であることが確認されたのである。

II トランペットヴォランタリーの演奏法

1) ピッコロトランペット

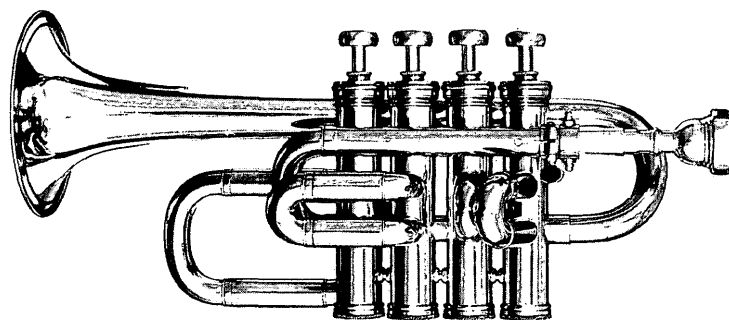


図2 ピッコロトランペット (セルマー社)

原調はD durであり、演奏にはピッコロトランペット (Piccolo Trumpet) が使用される。ピッコロトランペットはオーケストラや吹奏楽で使用されるトランペット (Mezzo Soprano Trumpet C管, B♭管) より約1オクターブ管長が短く、運指も1オクターブ下の運指を使用する。管長が短いことにより、低次の倍音を使用可能になり高音が安定する。音色的にはより明るく華やかになり、バロックや古典派の曲に合っている。

そもそもなぜバロックや古典派のトランペット曲が現代曲に比して高い音程を使用しているかは、その構造に理由がある。バロック期のトランペットはまだピストンが発明される以前であり、当時のトランペットは現在のトランペットに比してナチュラルトランペットと呼ばれるピストンがないものであった。約2メートルの管長 (現代は1.5M) で自然倍音だけしか演奏できなかったので、旋律を演奏するためには高次の倍音を使用し、唇の調節のみで演奏しなければならなかった。そのために現代と比べて比較的高い音程を使用せざるを得なかったのである。

ピッコロトランペットにはD管, B♭管, A管があり, Trumpet Voluntary には通常A管が使用される。理由は, D dur の曲をA管で演奏すると, F dur を演奏することになる。F dur をトランペットで演奏するとほとんどの運指が1番と2番ピストンを使用することになり, 他の運指より演奏上の負担が軽減されることにある。

2) ピッコロトランペットの第4ピストン

他の Mezzo Soprano Trumpet にはないピッコロトランペットの特徴として, 第4ピストン (ヴァールブ) がある。この第4ピストンはバロック期の音楽を演奏する際に必要となる。バロック期の音楽では音程の幅が広く, 音域より低い音も演奏する際に必要となる。そのために最近のピッコロトランペットは第4ピストンを備えている。各ピストンを押した時の音程差は下方に, 第1ピストンは長2度, 第2ピストンは短2度, 第3ピストンは短3度, そして第4ピストンは完全4度である。図3では第4ピストンを使用した際の音域の広がり (下方へ減4度) を示している。ピッコロトランペットの音域は2分音符で示してある。数字はピストン番号である。これらの音域は実際には1オクターブ高い音域である。また, ピッコロトランペットの実用音域は* D音までであろう。これ以上の音域についてはほとんど使用しないし, 音楽的にも限定される。

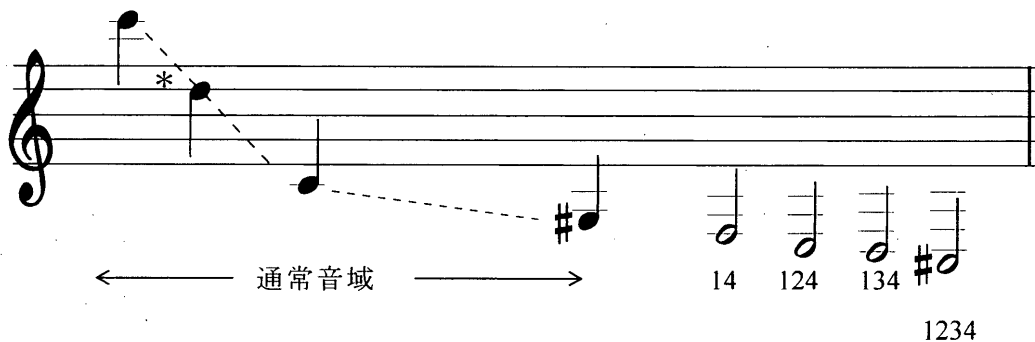


図3 第4ピストンを使用した音域

3) ピッコロトランペットの運指

表1 ピッコロトランペット運指図

0…ピストンを押さない。開放する。	3…第3ピストン
1…第1ピストン	4…第4ピストン (Piccolo Trumpet のみ)
2…第2ピストン	

① D d u r の音階をD管で演奏する場合の運指

Musical notation for the D major scale in the D tube. The notes are D, E, F#, G, A, B, C#, D. Below the staff, the fingering for each note is shown in a table format.

0	1・3	1・2	1	0	1・2	2	0
*14	*4	*234	*14	*4	*14	*4	*124
				*134	*1234	*234	*34

② D d u r の音階をB♭管で演奏する場合の運指

Musical notation for the D major scale in the B-flat tube. The notes are D, E, F#, G, A, B, C#, D. Below the staff, the fingering for each note is shown in a table format.

1・2	2	2・3	1・2	2	1・2	2	0
*234	*4	*234	*14	*4	*24	*14	*234
	*234		*1234	*234	*234	*134	

③ D d u r の音階をA管で演奏する場合の運指

Musical notation for the D major scale in the A tube. The notes are D, E, F#, G, A, B, C#, D. Below the staff, the fingering for each note is shown in a table format.

1	0	1・2	1	0	1	0	1
*14	*4	*14	*134	*124	*4	*234	*14
	*134	*1234		*34	*34		

ピッコロトランペット音程操作は演奏者に近い方から第1ピストン, 第2ピストン, 第3ピストン, 第4ピストンの4本のピストンにより行われる。このピストンを押す回数が少ないほど運指上のスピードとスムーズさを得ることができる。また, 演奏上では違うピストンを使用することより同じピストンを使用した方が演奏上もスムーズである。

上記表1 運指①の場合は、第2ピストンを2回、第3ピストンを1回使用する。ピストンを押す回数は全部で8回である。第3ピストンは単独で使用する場合は運指スピードにおいて問題は感じられないが、早いパッセージを演奏する場合、他の第1・第2ピストンと併用すると運指のスピードとスムーズさで劣る。さらに②では、DdurをBdurで演奏することになると長3度上方の調であるEdurに移調することになり、大変難しい運指になる。ピストンを押す回数は全部で11回になる。特に第3音から第4音に移る第2・第3ピストンと第1・第2ピストンの連続は運指上なるべくさげたい。第1・第2ピストンを第3ピストンに換える「換え指」もあるが、さらに運指を難しくする。最後に③では、DdurをAdurに移調すると完全5度上方のFdurを演奏することになる。運指は第1ピストンとオープンを多用し、第1・第2ピストンを1回使用する。ピストンを押す回数は全部で6回である。この運指は幹音のみの演奏では運指のスピードとスムーズさで他の運指に勝る。表2でも理解されるように、トランペットではDdurを演奏する際にはA管が最も演奏しやすく、適していることがわかる。また、第1・2ピストンは第3ピストン、第1・3ピストンは第4ピストンとの（換え指）があり、これを使用するとさらにピストンを押す回数が減る。

表2 各移調別のピストンを押す回数

原 調	楽器の調	移調した調	ピストンを押す回数
①Ddur	Ddur	Ddur	8回
②Ddur	Bdur	Edur	11回
③Ddur	Adur	Fdur	6回

以下は Trumpet Voluntary 冒頭部分である。以下は原調のDdurであるが、これをD管、B管、A管の運指を示しA管ピッコロトランペットが適していることを実際に示す。



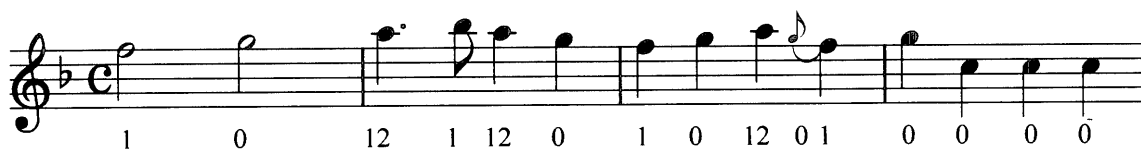
①D管 Piccolo Trumpet (移調された調はCdurになる)



②B管 Piccolo Trumpet (移調された調はEdurになる)



③ A管 Piccolo Trumpet (移調された調はF durになる)



上記は全て演奏上は同じ音程で演奏されるが、説明からも理解されるように、D管はピストンを24回使用する。B管は22回使用し、A管は10回である。このようにDdurをA管 Piccolo Trumpetで演奏することが演奏者にとって実用的であることが判別される。

4) ピッコロトランペットの機能と音色

Trumpet Voluntary を Piccolo Trumpet を使用し演奏する際に注意すべき点は、まず Piccolo Trumpet の機能を理解しなければならない。Piccolo Trumpet は管長が通常のトランペットの約半分の長さである。これは音域的に通常のトランペットに比して1オクターブ上方になる。また、Piccolo Trumpet には第4ピストンがあり、第1・第2ピストンを合わせた管長になる。これにより、上述の換え運指(換え指)を使用することができる。そして、増3度下方まで音程を伸張することができる。ただし第4ピストンを使用した運指は実用的ではない運指も含まれるので注意が必要である。音色についても最低音に近づくほど、Piccolo Trumpet 特有の輝かしい華やかな音色が失われる。

Piccolo Trumpet の音域は高音の輝かしさが特徴であるが、Mezzo Soprano Trumpet の使用音域最高音である上3点ハ以上になると、音を出すこと自体が難しい。このように使用音域について、その最低音は構造上同じ調の Mezzo Soprano Trumpet に比して増4度上方になる。つまり、使用音域は通常の Mezzo Soprano Trumpet に比して限られたものになっている。

では、なぜ Piccolo Trumpet をこの曲に使用するかは、その輝かしい音色も魅力であるが、何と言っても高音における安定性とスムーズな吹奏感にある。高音域では倍音が Mezzo Soprano Trumpet より低次のため、音程の「幅」を感じることができる。

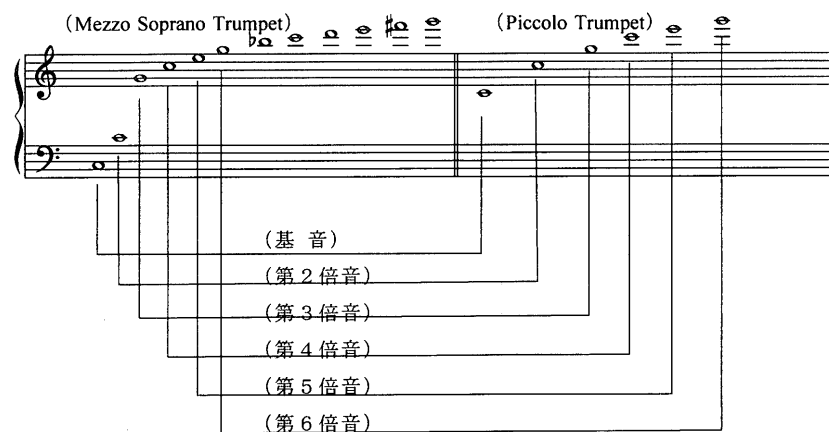


図4 Mezzo Soprano Trumpet と Piccolo Trumpet の倍音比較

上図のように第6倍音まででほとんどの音域をカバーすることができる。ただし、Mezzo Soprano Trumpet においても Piccolo Trumpet においても基音はペダルトーン（オルガンのペダルから命名した）と呼ばれ、特殊な音であり、音域外であるので使用しない。また、Piccolo Trumpet においては第6倍音は音域的に非常に高い音域になり、演奏には技術を要する。このような制限があったとしても、低次の倍音を使用するので、高音域でも演奏に際して安定した吹奏感を得ることができる。

5) Trumpet Voluntary (The Prince of Denmark's March) の装飾音技法

Trumpet Voluntary は、ロンド (RONDEAU) 形式の曲である。古典的演奏法では通常、繰り返しをする場合はなるべく装飾音を多用する。この曲も至る所に装飾音が使用されているが、規則的にトランペットと鍵盤楽器（ヴァージナル等）が同じ旋律を繰り返すので、装飾音も同じ旋律を繰り返すのではなく、多少変化させた装飾音の旋律を演奏する。ここで、トランペットの旋律について代表的な装飾音 (Ornamentation) を記述する。□内の数字は装飾箇所、主旋律下の数字は小節数である。また、枠内は装飾されたフレーズであり、主旋律と区別した。

The image displays musical notation for the first eight measures of 'Trumpet Voluntary'. It is organized into three rows. The first row shows measures 1-3 with boxed numbers 1, 2, and 3 above them. The second row shows measures 1-4 with a trill (tr) above measure 1 and a boxed number 3 above measure 4. The third row shows measures 4-8 with boxed numbers 4, 5, and 6 above them. The fourth row shows measures 5-8 with a trill (tr) above measure 5 and a boxed number 6 above measure 6. The fifth row shows measures 7-8 with boxed numbers 7 and 8 above them. The original melody is shown in a box at the top of each row, and the decorated versions are shown below. The decorated versions use trills and ornaments to embellish the original notes.

装飾 7 or 8

9 10 11 12

装飾 9 or 10 装飾 11

13 14 15 16

装飾 12 or 13 装飾 14 装飾 15

17 18 19 20

装飾 16 or 17 装飾 18

21 22 23 24

装飾 19 装飾 20

25 26 27 28

※19はオリジナルの旋律と若干違うが、現在では19と20の旋律が一般的である。

装飾 19 装飾 20

25 26 27 28



※25小節から32小節のフレーズはそれまでの勇壮なフレーズと異なり、柔らかく演奏する。そして最後に冒頭のフレーズが繰り返される。



※33小節から40小節までのフレーズについて、これまでのリピートは、トランペットが先行して演奏し、その後にピアノまたはオルガンのリフレイン (refrain) するが、このフレーズはピアノ又はオルガンの後にトランペットが演奏し華やかに終わる。

※装飾25は37、38及び39小節の装飾フレーズになる。筆者は装飾26及び27の装飾を採用している。

終わりに

冒頭に記述したが、Trumpet Voluntary は大変有名な曲である。40小節程度の小曲ではあるが、その歴史は深い。また、作曲者であるクラークについても当時は大変有名なオルガン奏者であり、作曲家であったにもかかわらずパーセルの陰に埋もれてしまった。今回のクラークという作曲者研究をとおして当時のイギリス音楽がかいま見えた。フランス、ドイツ、イタリアなどそれぞれ独自の音楽が存在し、「音楽に国境があった」時代を研究できた。また、Trumpet Voluntary は基本的な旋律に華やかな装飾を施すことが当時のスタイルである。その装飾は演奏者に任され、現代のジャズにも劣らない即興的演奏も可能である。演奏者にとっては興味深いことである。どのような演奏がこの曲に相当であるのかを研究することは、筆者にとって今後の演奏技術向上のために意義あることであった。

注

- (1) Henry Purcell (1659ロンドン～1695.11.21ロンドン) はイギリスの作曲家で、36年の短い生涯に多くの優れた作品を残した。彼はイギリス王室と縁が深い作曲家であった。礼拝音楽や器楽曲、舞台音楽のほか、王室の祝典のために様々なオード (Odes 神仏をたたえる歌、自然の事象にことよせて高揚した精神をうたう叙情詩) を作曲した。Jeremiah Clarke は Purcell の死に際して、「Come Come Along for a Dance and a Song」というオードを作曲した。(『新訂標準音楽事典』pp.1387-1388.)
- (2) 浅香 淳編『新訂標準音楽事典』(音楽之友社) pp.548-549.
- (3) Thomas Fuller Taylor, *The Life and Works of Jeremiah Clarke (c1673-1707)* (Ann Arbor, Michigan, University Microfilms, Inc., 1967) p.6
- (4) ホーキンス; Sir John Hawkins (March 30, 1719, London～May 21, 1789, London) 治安判事, 作家, イギリス初の音楽史を著作する。
- (5) Thomas Fuller Taylor: *The Life and Works of Jeremiah Clarke (c1673-1707)* pp.6-9.
- (6) 当時楽譜は6線譜である。上段の第2線からが現在の5線, 第1線は下第1線である。同様に下段の第6線は上第1線である。
- (7) Henry Wood (1869・3・3 London～1944・8・19 Hitchin) イギリスの指揮者。10歳からロンドンの教会でオルガン奏者を務めた。その後、王立音楽院 (RAM) で学んだ。1888年指揮者としてデビュー, 1895年から50年間も有名なプロムナード・コンサートの指揮者を務めた。1904年にはイギリスの指揮者として初めてニューヨーク・フィルハーモニーを指揮した。また、欧米各地に客演して好評を博した。ロンドンではプロムナード・コンサートなどの音楽行事を推進し、聴衆と楽壇の両方から敬愛された。特にシベリウスとイギリスの作曲家を紹介した功績は大きい。1911年、〈ナイト〉に叙せられ、1926年オックスフォード大学から名誉音楽博士号を贈られた。
(*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 1980) pp.517-516.
- (8) Thomas Fuller Taylor (1937-), Northwestern University, Ph.D., 1967 Music

参考・引用文献

- 1 Thomas Fuller Taylor, *The Life and Works of Jeremiah Clarke (c1673-1707)* (Ann Arbor, Michigan, University Microfilms, Inc, 1967)
- 2 Stanley Sadie, *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (London, Macmillan Publishers Limited, 1980)
- 3 浅香 淳編『新訂標準音楽事典』(音楽之友社, 1991)
- 4 Gerald Webster, *Method for Piccolo Trumpet* (The Brass Press, 1980)

(2004年12月2日 受理)